

老年期の死の意味づけを巡る研究知見と課題

川 島 大 輔

1. はじめに

世界一の長寿国となったわが国では、嘗てのように住み慣れたわが家で家族や親戚に囲まれながら自然に死を迎えることが困難になってきており、それ故ターミナルケアや尊厳死など、高齢者が死に臨む際のあり方や死に方を巡る問題への社会的関心がこれまでに高まってきている。しかしながらわが国の高齢者が自らの死を如何に捉えているかという基礎的な事柄に関しては確かな情報が驚くほど欠落しており、十分な実証研究の積み重ねがなされてきたとは言い難い(青木, 2000; 河合・下仲・中里, 1996; 黒田・他, 1994; 辰巳, 2000)。さらには報告数の少なさにも拘らず、わが国における高齢者を対象とした死の意味づけに関わる研究においては、それぞれの研究者が用いる定義について十分な議論がなされぬままに今日に至っており、それ故に概念間の関係性が曖昧で、研究間の十分な比較検討が行われていないというのが現状である。

従って本稿の目的は、諸研究の知見を整理することで今後の研究の足場を形成することである。具体的にはまず諸研究において用いられる死生観あるいは死への態度などの諸概念の整理および定義づけを行う。続いて今日のわが国における死の意味づけに関する研究に多大な影響を及ぼしている欧米での研究の歴史的推移を把握する。そしてわが国の研究知見から死の意味づけが如何に構造化されているのかを、特に因子分析の結果より呈示された概念構造を概観することで明らかにする。さらにそれらの下位項目である関連要因について欧米での知見も踏まえながら検討することで具体的にどのような要因と死の意味づけが関連しているのかを明らかにする。そして最後に研究上の問題、特に方法論に依拠した諸課題を取り上げ、それらへの質的アプローチの有用性を呈したい。

2. 死の意味づけに関わる諸概念の定義とその問題

2-1. 死の不安と恐怖

これまで死の意味づけに関わる研究領域において、研究の初期より最もその定義づけが問題視されてきたのは、恐らく死の不安*anxiety*と恐怖*fear*の区別であろう (e.g. Kastenbaum & Costa, 1977; Neimeyer & Van Brunt, 1995)。つまり特定の対象に対する怖れを恐怖、はっきりした対象のない漠然とした怖れを不安と区分する場合がある一方で、両者を判別することは意味を成さないとの意見もあり、これらの区別に関する統一した見解が未だに得られていないのである。但し Neimeyer & Van Brunt (1995: 52) が述べるように、死の不安と恐怖の区別については概念的ある

いは実践の見地においては説得力に欠く上に、実際の研究においては減多に区別されて用いられることはない。また、死の不安を死という状況に対する予期から起こる個人が日々の生活の中で経験する死と死に逝く過程に対する恐怖として位置づけるならば (Fry, 2003), 議論の余地は残しつつも、両者を不可分なものとして扱うことが妥当であると考えられる。

2-2. 死の受容と否認

「死の受容 *death acceptance*」及び「死の否認 *denial*」についても同様の問題が見られ、膨大な数の一般書物や臨床研究が独自の見解を呈している一方で、その定義について実証的見地から明らかにしているものは皆無に等しい。この問題の所在は、多くの研究において常に指摘されている包括的な理論モデルとその理論に基づいた研究方法の欠落、及び実践場面との乖離 (e.g. Kasternbaum, 2001; Neimeyer, 1994; Tomer, 1992; Tomer & Eliason, 2000a) に見出すことができる。

その中であって、自己の終焉に対する受容は単に死の怖れの不在を示すのではないという実存的仮定に基づいた実証的研究を展開している Wongらによる定義は着目に値する。すなわち死の回避の中核に位置するものが「否認」であり (Wong, 2000: 29), 一方「死の受容」とは自身の終焉に対する認知的な気づきとその知覚への肯定的あるいは中立的な感情の反応を含む「最終的な退場に心理学的に準備すること」である (Wong, Reker, & Gesser, 1994: 124)。しかしこの Wongらによる定義にも問題がないわけではない。つまり Kastenbaum (2004: 36-41) が述べるように、死の受容や否認はそもそも外的環境からの影響を多分に受け、長期に亘る他者との関係性の中で日々刻々と変化する様々な側面を表しているものであり、さらにそれらは個人が達成しようとする、あるいは対抗しようとする何かを理解する立場にいない場合においてのみ評価できるものである為に、自己報告による質問紙から描き出されるようなものではなく、寧ろ現実生活の状況における真の力を表すものであるならば、蓋しそこには意味の豊かさを十分に掘り得ない方法論的な問題が存在しているとも考えられる。この問題は今後の課題と展望の部分において再度取り上げたい。

2-3. 死への態度、死生観、死の意味づけ

死の怖れや受容は死の意味づけの一側面に過ぎないとして、近年では死の肯定的側面と否定的側面、そして何れの価値も含まない中立的な側面を包含する概念として「死への態度 *death attitudes*」が呈示されている (e.g. Gesser, Wong, & Reker, 1987; Ranst, & Marcoen, 1999; Wong, et al, 1994)。この「死への態度」について特に Morgan (1995) は、死への態度は多かれ少なかれ特徴的な形で振舞う事への永続的な準備であると定義付けられる (Kalish, 1978) ことから一般的な態度と異ならないと述べており、然るが故に概念的には感情 *affect*, 認知 *cognition*, 行動 *behavior* の 3 成分によって構成されると考えてよいだろう。しかし実際の実証研究においては、死や死に逝く過程に対する行為傾向について言及されることは稀であり、むしろ感情や信念についての言語的叙述を主として把捉している為に、わが国では「死生観」と同義的に用いられている。その他、金児 (1997) が死に対する相対的態度構造として位置づけている「死観 *death perspectives*」や、堀 (1996a, 1996b) の「死への意識」も、その認知や感情の把捉を志向している点において共通している。

ところで上記を踏まえた上で「死の意味づけ *meaning of death*」についても同様に定義すること

が必要であろう。「死の意味づけ」は、それが死や死に逝く過程への感情や認知の枠組み、そして意味づける行為も含む程度においては、概念的な意味での死への態度とほぼ同義であると考えられる。しかし死の意味づけはさらにそれ以上のものを含意する。すなわち意味は、意味づけの意思と意味を求める意思という2つの異なった、しかし相互に関係した側面を持つと考えられ、一方は間接的で定義的な意味、つまりライフイベントや人生一般についての解釈に対し言及した経験に対する意味であり、先の3成分は主として言語的記述により把握されたという点においてこの解釈学的な意味と同様である。もう一方はライフイベントや誰かの人生について誰かが抱いている目標や動機に対し言及した実存の意味あるいは意味に満ちたもの、つまり意味の経験と呼ばれるものである（Reker & Chamberlain 1999a: 1）。従って「死の意味づけ」は概説した諸概念を包括するものとして位置づけられよう。

3. 欧米での死の意味づけに関する研究の歴史的推移⁴

Neimeyer & Van Brunt (1995)によれば、欧米では死の認識について比較的早期から関心が高まってきたものの、実証的なデータに基づいた研究が行われるようになったのは近年になってからであり、実際の研究のピークは社会的な関心を集めたKubler-Loss (1969)の「On death and Dying (死ぬ瞬間)」の出版より数年が経過した77年から84年と、86年から90年にかけてである。この中で特に発展が目覚ましいのが、95年までの20年間に刊行された研究の95%以上が採用している直接的に死への態度を問う質問紙法によるものである。

こうした研究の初期から一貫して関心が高まってきたのは高齢者の死に対する不安や恐怖などの死の否定的側面についてであり、本格的な研究は、死の不安尺度を作成することから始められといえる。代表的な死の尺度としてはDeath Anxiety Scale (DAS; Templer, 1970)が挙げられる。

しかしその後、死の怖れは一次的ではなく、多次的に把握することが叫ばれるようになり、Revised Death Anxiety Scale (RDAS; Thorson & Powell, 1994)、Hoelter Multidimensional Fear of Death Scale (MDFODS; Hoelter, 1979; Neimeyer & Moore, 1994)、Collett-Lester Fear of Death Scale (Collett & Lester, 1969; Lester, 1994)などの尺度が開発されている。

さらにこうした死の不安感の尺度化を進展させる一方で、死の否定的な側面のみでなく、その肯定的側面にも目を向けることの重要性が叫ばれるにつれ、死への態度を多次的に捉えようとDeath Attitude Profile (DAP; Gesser, et al, 1987)を経て、否定的側面としての「回避」「恐怖」と3つの受容の形態、すなわち「積極的受容」「中立的受容」「回避的受容」の5つの態度からなるDeath Attitude Profile-Revised (DAP-R; Wong, et al, 1994)が開発されている。

4. 国内における死の意味づけに関する研究：概念構造についての検討

まず杉山ら(1986)は調査表に従った面接調査を実施し、死の受容・平安な死、家族・治療者への親和性、人生に対する満足感、信仰、他者の死の体験によって構成される「生命の質と死の受容(これを杉山らは死生観の基本としている)」、死後への気がかり、人生への不満足感によって構成される「人生と死についての充足感-不満感」、疾病の予後に関する精神的働きによる「疾病予後についての不安」の3因子によって「死生観」の心理空間構造を説明している。また金児(1995)は、老人大学の高齢者を対象にした調査において「浄福な来世」「遺族への配慮」

「未知」「苦痛と孤独」「挫折」「不可測」「虚無」の8つの因子を、また若年層を取り入れた調査では「暗黒と消滅」「恐怖」「浄福な来世」「無関心」「人生の試練」「生の証明」「未知」「虚無」の8因子を見出している。さらに河合ら（1996）はDASとDAPを用いた面接調査を行い、「死の不安」「死の恐怖」「積極的受容」「中立的受容」「回避的受容」の因子を抽出している。⁵ また青木（2000）は、死観尺度に新たな質問項目を加え、最終的に「死の恐怖」「死への諦観」「生の証明」「至福な来世」「死の不可知性」「長寿」の6因子を抽出している。そして小池・岩脇（2001）は、10代から70代までの男女507名に対して質問紙調査を行い、最終的に「死の受容」「死後の世界の存在」「死の思索」「死の恐怖」の4因子を抽出している。

以上の因子分析の結果より呈示されている概念構造を概観すると、各研究において通底するものとしてまず挙げられるのが「死の怖れ」である。これは杉山ら（1987）および金児（1995）の老人大学の高齢者を対象とした調査以外で独立した因子として抽出されていることから、Wong（2000: 28）の、死の怖れは最も強力で普遍的な死への態度と見做せるとの見解には賛同できるものである。但し河合ら（1995）は死の恐怖の次元を死の過程への恐怖と分離して検討した結果、純粋な死の不安より死に際の苦しみについての怖れに高い反応率が示されることを見出しており、今後は両者を区別して調査すべきかもしれない。加えて死を未知なるもの、苦痛と孤独、挫折、あるいは不可測なものとして見做す、単なる恐怖とは異なる死の否定的側面も呈示されており、死の怖れのみならず否定的な意味づけの多様性にも配慮することが必要である。

次に何れの概念構造においても見られるものは「死の受容」である。但し、小池・岩脇（2001）において抽出されている「死の受容」がむしろ死の怖れの対立項として位置づけられているのに対し、その他の研究ではより具体的な受容の形態が独立した形で抽出されている。すなわち死後の世界への肯定的な言及によって構成される「積極的受容（河合・他、1996）」は、「死後の世界の存在（小池・岩脇、2001）」や「至福な来世（青木、2000）」、「浄福な来世（金児、1995）」と対応しているといえよう。また河合ら（1996）の「中立的受容」に関しては、命への儚さへの悲嘆と捉える日本人的な無常観を示す「虚無（金児、1995）」や「死への諦観（青木、2000）」と対応しているといえる。

その他には、金児（1995）と青木（2000）においては、死ぬまでに生きた証を残すことを志向する「生の証明」が対応しているが、これは死によって人生が完成するとする「人生の試練（金児、1995）」とも関連していると思われる。しかし、死についての思考や発話を示す「死の思索（小池・岩脇、2001）」、長生きすることを望む「長寿（青木、2000）」、死を現実の苦痛からの逃避と見做す「回避的受容（河合・他、1996）」については対応する因子が見られない。

以上、高齢者の死の意味づけには凡そ次のものが通底していると考えてよいだろう。すなわち死そのものと死に近づく過程への怖れ、死後への肯定的な意味づけ、人生に対する無常観である。

5. 国内における死の意味づけに関する研究： 関連要因の検討

5-1. 人口統計学的要因⁶

a. 年齢

わが国における高齢者の死の怖れについて、荒井（1994）は55歳から100歳の中老年男女93名

に面接を行った結果、年齢とともに死の恐怖を訴える数は減少し、65歳以上の人々（68名）の中では僅かに5名のみが死の怖れを訴えたと述べている。また橋本ら（1993）は、墓、葬式などの「死」を連想させる絵画の呈示を行いどのような感情が起こるか調べた結果、60歳代以降になるとそれまでの忌避観、恐怖感を示す回答が減り、さらに80歳代以降になるとなんとも思わないという回答が有意に増えたとしている。さらにShneidmanの「You & Death」に倣った一連の研究を行っている伊藤ら（1991）は、老人達の64%が、死を「眠り、休息、再生、新たな始まり」などと次への発展的なイメージで捉えたとし、年齢の増加に伴い「終局」の意味は減少し「再生」の意味が増加していると述べている。従って概ねわが国の高齢者の多くは若者よりも死を恐れないといえ、欧米諸国における研究報告（Thorson & Powell, 2000; Ranst & Marcoen, 1999; Wong et al, 1994. レビューとして Kalish & Kasternbaum, 2001）と同様である。しかし一方で年齢要因は影響しないとの報告（金児, 1995; 小池・岩脇, 2001）もあり、結論付けるには更なる知見の集積が必要である。

一方、高齢者のみを対象とした研究では死の怖れと年齢要因の影響は認められず（青木, 2000; 河合・他, 1996）、これは老年期において年齢は死の不安と関連しないとするFortnerらの結論と同様である（Fortner, Neimeyer, & Rybarczyk, 2000; Neimeyer & Fortner, 2001）。また受容に関しては、小池・岩脇（2001）では年齢を重ねるにつれて死を受容できるようになる傾向が示され、金児（1995）は死観の中でそれが最も希薄であるとしながらも年齢との有意な相関を報告している。しかし青木（2000）においては「死への諦観」のみが男女ともに加齢に伴う有意な変化を示し、また河合ら（1996）においては「中立的受容」の平均点がGesserら（1987）の結果と同様に高かった一方で、積極的受容とは関連していなかったと報告されていることから引き続き検討していくことが必要である。さらにわが国の高齢者は死を人生の試練の場や最後のプロセスとして意味づける傾向が強く（菅・他, 1991; 金児, 1995）、生きた証を得ようとする傾向が見られるという（青木, 2000; 金児, 1995）。

以上のことから、わが国の高齢者は受容の中でも特に人生に対する無常観から死を受容する傾向があり、幸福な来世を望む傾向が希薄であるが、一方で生きてきた証や人生の集大成を得ようとする最後の場として死を意味づけているといえる。但し死の不安について「怖れていない」と断言しきれない感情の揺らぎや肯定的・否定的側面の両方が増加しているアンビバレントな意味づけが伺われたとの多くの報告がなされていることから（青木, 2000; 金児, 1995; 河合・他, 1996）、研究の蓄積とともに複雑な意味の揺らぎをも掬い得るアプローチが切実に求められているといえよう。

b. 性別

一般的には死の怖れの程度については女性の方が男性よりも高いと言われている（e.g. Fortner, et al, 2000; Neimeyer & Van Brunt, 1995）が、こうした性差は若いコホートで見出されたものであり、高齢者の死の意味づけに関して性差はみられないとの見解が支持されている（Fortner, et al, 2000; Neimeyer & Fortner, 2001; Ranst & Mrcoen, 1999）。

一方、わが国の日本人高齢者を対象とした調査では、死の怖れの程度について性別による差異は見られないとする報告（河合・他, 1996; 青木, 2000）も見られるが、女性の方が男性よりも死

の怖れが高い傾向が見られるとする報告（辰巳, 2000）、逆に男性の方が女性よりも死の怖れが高いとする報告（金児, 1995）があり、一致した見解が得られていない。

また死の受容に関しては、女性高齢者は男性高齢者に比べて幸福な来世意識が高く、無常観は低いとの報告（青木, 2000; 金児, 1995）や、また「死は苦しみからの解放である」や「死後、魂が残ると思う」などのWongら（1994）の回避的受容や積極的受容と関連すると考えられる項目において性別に関する傾向差が見られたとの報告（辰巳, 2000）の一方で、河合ら（1996）は受容に関しても有意な性差は見られなかったとしていることから引き続き検証していくことが必要であろう。

c. 家族の存在

河合ら（1996）によると家族の存在は死の意味づけと大きな関連があるという。つまり配偶者がいない場合は現在の満足感が乏しく、恐怖は高く、現世からの回避から死を受容する傾向が強い。また子どもは安心して自分の死と死後を委ねられる存在であることから低い死の怖れと関連し、さらに孫の存在は生きる張り合いを与えることで回避的受容の低さと関連しているのだという。また杉山ら（1986）も、配偶者が生存している場合には現実の生に肯定的で、身体が不自由なままでも生きること、死後の再生を期待しているが信仰に頼ることは少ないが、死別している場合は現実の生に否定的で、信仰をもって毎日を拝んでいるものの割合が多いと報告している。

さらに杉山ら（1986）は、最後に看取ってもらいたい人が、配偶者や子どもなどの近い人であるときは、医師や看護婦であるときと比較して、死の受容がある程度発達しており、平安な死の受け入れが成し遂げられているようであると述べている。また黒田ら（1994）も配偶者から介護されている高齢者はそうでないものと比べて短命を期待するものは少なく、配偶者との繋がりが短命期待を防止していると考えられると述べている。これらの報告は、老人は親しい人にみとられながら死んでゆきたいという心性が存在しているという荒川（1994）の結論を支持するものである。

しかし一方で、橋本ら（1993）の研究結果から「死」が差し迫ったとき側にいて欲しい人は50歳代から70歳代では子どもを挙げるのに対し90歳代では医療スタッフに求めている、高齢になるに従い家族からの離脱を希望していることが認められる。理由として他人に迷惑をかけたくない、これ以上苦しmitたくない、あるいは老醜を晒したくないというものが多いためであろうと橋本ら（1993）は述べているが、前述の親しい人に看取られながら死んで逝きたいという願望とのアンバランスには今日の社会的状況が密接に関わっていると考えられる。

d. 死の経験

近親者の死の経験は、老人の現在の死への態度に最も影響を与えているものの一つである（伊藤・他, 1991; 伊藤・松岡, 1993; 川島, 2004）。とくに家族との死別体験のあるものは死を積極的に評価することによって死を受容する傾向が認められたとの報告（河合・他, 1996）や、他者の臨終場面に立ち会った体験の有るときは良質の「死生観」と、無いときは不良な「死生観」と関連する傾向が認められたとの報告（杉山・他, 1986）は「近親者の死の経験」の重要性を強調するものである。ところで伊藤ら（1991）は現在の死に対する態度に最も影響を与えたものを「身近

なもの死」と答えるものが、女性は男性の2倍多いと報告しており、女性は子どもの死や配偶者の死からの影響を受ける機会が多い可能性が考えられる。

一方で、欧米における諸研究を概観した結果、Neimeyer & Van Brunt (1995) は近い友人や近親者との死別などの悲哀の経験と、死への関心との関係性を見出すことはできないとしている。これはわが国では人と人との関係性が個人の信念や態度の形成に深く影響している為と考えることもできようが、何れにしても更なる研究の集積が必要である。

また近親者との死別体験の他に臨死体験*near death experience*については、体験者の死の怖れや回避的受容の傾向は低く、生かされている現在を慈しもうとする姿勢が見られると報告しているが(河合ら, 1996; Neimeyer & Van Brunt, 1995), この点に関して川島(2004)は自らの死を意識するような病や事故の経験が死の意味づけを大きく転換させる出来事であることを明らかにしている。

e. 健康状態

高齢者自身の健康状態は、近親者の死の経験とともに死の意味づけに影響を及ぼす主要な要因である(伊藤・他, 1991; 伊藤・松岡, 1993; 堀, 1996a)。具体的には、健康に自信があるほど死を「一種の眠り、休息と平和」とする答えが少なく「精神の再生」や「人生の新たな始まり」といった発展的な捉え方が多くなっているとの伊藤・松岡(1993)の報告や、既往歴や現在の疾病が死の見方に大きく影響するとして具体的な疾病の種類によっても死への認知の仕方が大きく異なることを述べている杉山ら(1987)の報告が挙げられる。この健康状態と死の意味づけとの関連は欧米においても確認されており、健康状態が悪いほど死の不安が高いことが示されている(Fortner, et al, 2000; Neimeyer & Van Brunt, 1995)。また黒田ら(1994)は健康状態の程度の低いものは回避的に早期の終焉の到来を希望すると報告しているが、これはRanst & Marcoen (1999)による後期高齢者の健康の質と回避的受容が関連するとの指摘と一致するものである。

5-2. 人格的要因⁹

a. 宗教と信仰

宗教と死の怖れとの関係性はこの分野の研究当初から考慮されてきた問題であり、多くの研究知見は宗教と死の意味づけとの密接な関係性を示唆している。例えばTomer & Eliason (2000b)は、宗教への傾倒は有意味性の感覚を向上させ、死の受容を促進する傾向があるとしており、またThorson & Powell (1990)も高齢のものは有意に高い宗教的な動機づけを持ち、低い死の怖れを得点すると述べている。さらに内発的宗教性(Allport, 1966)と死後の世界への信念、低い死の怖れ、そして死の積極的受容との関連が多くの研究において示唆されている(e.g. Falkenhain & Handal, 2003; Ranst & Marcoen, 1999; Thorson & Powell, 2000; Wong, 2000)。

一方わが国の研究結果はより混沌としている。つまり老人の多くは自らを信心深く、また宗教や信仰を死への態度に影響するものとして捉えており(伊藤・他, 1991; 菅・他, 1991; 伊藤・金崎, 1992), 特に信仰は死後世界への信念と強い関連が見られ(金児, 1995; 河合・他, 1996), 宗派に関係なく、信徒は非信徒よりも来世信仰が強い(金児, 1997: 324)との報告の一方で、若年層の方が死後の世界の存在を信じているとの報告(小池・岩脇, 2001)や、信仰の有るものは確か

に無いものより幸福な死後の世界を信じる傾向があるものの、その期待は非常に微弱である為、天国や死後の世界といった宗教的信念は強力な支えにはなっていないとの報告（伊藤ら, 1991; 伊藤・松岡, 1993; 河合・他, 1996）もあり一致した見解が得られていない。

このような議論の紛糾には次の理由が考えられる。つまり第一にはNeimeyer & Fortner（2001）やFortnerら（2000）が、宗教的な正統性と信念が死の受容と大きく関連している一方で単なる礼拝や宗教的な活動への参加は死への態度と関連していないことからそれらの区別を主張しているにも拘わらず、わが国の諸研究においてはそのような区別は金児（1995, 1997）を除いて行われていないという問題である。第二にはわが国の宗教観は非常に特異であり、特定の教義や教祖を抱く宗教や宗派に属さない個人は言うまでもなく、特定の宗教を持つ個人においてさえ土着の自然宗教や民間信仰からの影響を暗黙裡のうちに受けており、明示的な教義をもつ宗教と同様にわが国における個人の死に対する意味づけの形成に大きく寄与していると考えられ、特に幼少より生活のあらゆる場面において素朴で豊かな信仰の中に育ってきた現在の高齢者にはその傾向は顕著であるにも拘わらずこれまで軽視されてきたことである。そしてこれらの問題点を考慮した川島（2004）によれば、宗教や信仰は死の意味構築に重篤な影響を及ぼす社会文化的要件であることが示唆されている。

b. 自我の統合

死の不安と自我の統合の関係性について、特にFortnerら（2000）は低い自我統合の程度は高い死の不安の予測因子となると指摘している。またこの自我統合は人生に対する満足感とともに居住形態と密接な関連があり、自我統合の程度が低い施設入居者は死についての高い懸念に特に脆弱であるという（Neimeyer & Fortner, 2001）。一方わが国においては、現在のところ自我統合と死の不安や受容との関係性を直接扱った研究は見られないが、岡本（1990）は高齢者の自我同一性の達成度と死の受容の関連について調査を行い、死の受容群は否受容群に比べて自我同一性の達成度が高く、老年期以前の人生段階における心理社会的課題をより達成していることを明らかにしている。但しこれらの研究においては、自我統合を測定する方法についての議論の不足に加え、自我統合が死の不安や恐怖と実際にはどのような交互作用を有するのかは明らかとなっていない。それらに寄与する複雑な背景も含め今後明らかにすべき課題である。

c. 有意性

死の不安との関連において、Tomer & Eliason（2000b）は人生に対する有意性*meaningfulness*の強い感覚は、年齢を問わず、人生を価値あるものとして見做し、非存在の恐怖を低減するのに貢献すると報告しており、また主観的幸福感の高いものは、死を人生の不可避免的な現実として受容する傾向が強く（Ranst & Marcoen 1999）、人生への肯定的な意味づけは、積極的受容と中立的受容に有意に相関している（Wong, 2000）との報告もなされている。

一方わが国においても、辰巳（2000）が死の不安が高いこととQOLの低さの関連を報告している。また小池・岩脇（2001）は、過去・現在・未来のそれぞれに対する評価のうち、過去と現在に対する肯定的評価が死の受容と正の相関を、死の恐怖とは負の相関を有し、未来への楽観的予測は死後世界の存在に対する信念と正の相関を、死の恐怖とは負の相関を示したと報告している

ことから、人生に対する肯定的な見方は死の怖れと受容に関連しているといえよう。

6. 総括と展望

6-1. 総括

本研究では今後の研究の足場を形成することを目的として諸研究の知見の概観、整理が行われた。具体的にはまず諸概念の定義の再考が行われた。ここでは死の怖れや受容を認知、感情、行動の3側面から捉え、さらにその中核に実存的意味を据える「死の意味づけ」を、諸概念を包括する概念として定義された。続いて欧米での死の意味づけに関わる研究の歴史的推移を概観した上で、わが国における高齢者の死についての意味づけの概念構造を整理した結果、死と死に近づく過程への怖れ、死後世界への肯定的な意味づけ、そして人生に対する無常観が概ね通底していることが明らかとなった。関連要因については、とくに若年齢層との比較において有意な年齢差が見られるものの、高齢者間での年齢差や性差については一貫した知見が得られていない。さらにそれら以外の諸要因との関連が指摘され、とくに家族の存在、身近な者の死、健康状態が大きく死の意味づけに関与していることが示唆された。ただし関連が指摘された諸要因は他者との関係性を媒介して意味づけに影響している可能性も伺われる。さらに欧米では特に顕著な要因である信仰に関しては結果が一貫しておらず今後更なる研究の蓄積が求められていることが呈示された。

6-2. 課題と展望

今後の研究の課題としては包括的な理論体系の構築、より精緻化された計画、要因の統制、そして高齢者を代表とするサンプルの丁寧な選定に取り組むことが挙げられる一方で、Neimeyer (1997-98) による、調査者は死に対する意味づけの全ての関連する側面が質問紙によって評価可能であるとの思い込みに用心すべきであるとの警鐘に見られるように、研究の大部分が採用している質問紙法についてのより本質的な問題も存在している。

すなわち第一には、質問紙偏重の現状においては個人内でのアンビバレントな感情や意味の多様性を掬い得ていないという問題である。第二には、死の意味づけに関連する多様な要因が報告されているものの、それらの如何なる相互作用のダイナミクスのうちに個人の死の意味づけが構築されるかに焦点が当てられていないという問題である。すなわちNeimeyer (1994: 270) が述べるように人間の死に対する態度はそれらが本質的に時に生きることに対するものであるという意味において、本来的に時間的なものであるが、Reker & Chamberlain (1999b: 201) が述べるように、死の実存的意味のプロセスと老年期という特定の人生段階を関連付けようとしたEriksonらによる努力にも拘らず、現存の理論的アプローチには発達の論点が欠如しているという問題である。そして第三には、死の意味づけは解釈学的意味においても、実存的意味においても文化や歴史の制約を免れず、宗教や哲学的体系などのイデオロギーの影響を受けており、別言すれば死の意味づけは個人的であると同時に社会的である (Kenyon 1999: 9) にも拘らず、個人的経験と社会文化的影響が如何なる相互作用において死の意味づけを構築するのかについては殆ど触れられていないという問題である。

然り而して上記の諸問題への有効なアプローチとして質的アプローチ¹⁰を呈示したい。それは次の理由からである。すなわちReker & Chamberlain (1999b: 203) が述べるように、意味づけは本質的に経験的、構成的であり、そして言語的に接近できる為に、質的なアプローチは意味の知見を実質的に拡張し、この領域を開拓する特有の根拠を持つといえ、さらにCarverhill (2002) が述べているように、個人や集団についての語りや物語の面白さに焦点化する様々なデータ収集の方法論をもつことで、質的研究は死の意味づけに関わる研究領域において顕著な可能性を有しているからである。その中でもとくに個人が紡ぐ物語へのアプローチは、Bruner (1987) が述べるように、人生についての物語を、人生を生成するための一連の手続きと見做すことで、ある人生の表現として意味を成すものに光を当てることが出来るアプローチであるといえよう。¹¹ さらに生涯における個人の経験についての研究は、語りの形態の操作とそのライフストーリーが他のストーリーとどのように結びついているかに注目することを求めるが故に (Polkinghorne 1988: 119)、個人にとって主観的に重要な諸要因と死の意味づけの関係性を問うことが可能である。

具体的な研究として、例えばViney (1993: 162-173) は老年期の幾つかの異なった死に方の様式や死に直面した際の感情反応について、西洋文化で共有され、宗教的信念や老人の死における自我統合の役割を担う死に方への隠喩や物語を探索している。またNeimeyer (2001) は悲嘆への心理療法的介入において人生の新たな意味を見出すための道具としての物語の有用性を報告している。また老年期に焦点化してはいないものの、Owens & Payre (1999) は、死と死に逝く過程についての質的研究として、インタビュー、ケース・スタディ、参与観察、パーソナルコンストラクト理論に基づくアプローチ、グラウンデッド・セオリー、言説的アプローチについて簡単に紹介し、その有用性について述べている。この他にも他者の死の意味づけや慢性疾患患者の死の意味づけについての質的なアプローチ¹²が報告されているが、その一方で本稿で扱ってきた老年期の死の意味づけに実証的見地から迫るものは稀有である。またわが国においては辰巳 (2000) が死後観についての半構造化面接を行い、死の不安の程度によって判別された群間によって死後についての語りが異なることを明らかにしているが、理論に基づく方法論を明確に呈示している質的な研究はこの分野において未だ皆無に等しい。

このような現状を受け、川島 (2004) は老年期の死についての豊かな意味を掬うことを志向し、個人が紡ぐ物語に着目した研究を展開している。またそこでは特に社会文化的背景としての宗教との如何なる相互行為において意味づけが構築されるのか、さらにその意味づけが生涯に亘り経験する様々な出来事を通じどのように発達変化していくのかを明らかにしている。

蓋しこの領域において質的な方法による研究は未だに発達途上にあり、今後更なる研究の蓄積が切実に求められているといえよう。

謝 辞

本論文の作成に当たり適切にご指導を頂きました、京都大学大学院教育学研究科のやまだようこ教授、ならびに遠藤利彦助教授に記してお礼申し上げます。

引用文献

青木邦男. (2000). 在宅高齢者の死に対する意識の構造と加齢による変化. 山口県立大学社会福祉学部紀

- 要, 6, 77-86.
- 荒井保男. (1994). 老年期と死. In 荒井保男・星薫 (編著). *老年心理学* (pp. 174-196). 東京: 放送大学出版.
- Black, H. K. & Rubinstein, R. L. (1998-99). Narratives of three elderly African-American women living in poverty who have lost an adult child to horrendous death. *Omega*, **38**(2), 143-161.
- Bruner, J. (1987) Life as narrative. *Social research*, **5**(1), 11-32.
- Carverhill, P. A. (2002). Qualitative research in Thanatology. *Death Studies*, **26**(3), 195-207.
- Cicirelli, V. G. (2000). Older adult's ethnicity, fear of death, and end-of-life decisions. In A. Tomer (Eds.), *Death attitudes and the older adult: Theories, concepts, and applications* (pp.175-91). New York: Brunner-Routledge.
- Crossley, M. L. (2000). *Introducing narrative psychology: self, trauma and the construction of meaning*. Buckingham, Philadelphia: Open University Press.
- Falkenhain, M., & Handal, P. J. (2003). Religion, death attitudes, and belief in afterlife in the elderly: untangling the relationships. *Journal of Religion and Health*, **42**(1), 67-76.
- Fortner, B. V., Neimeyer, R. A. & Rybarczyk, B. (2000). Correlates of death anxiety in older adults: A comprehensive review. In A. Tomer (Eds.), *Death attitudes and the older adult: Theories, concepts, and applications* (pp.95-108). New York: Brunner-Routledge.
- Fry, P. S. (2003). Perceived self-efficacy domains as predictors of fear of the unknown and fear of dying among older adults. *Psychology and Aging*, **18**(3), 474-486.
- Gesser, G., Wong, P. T. P., & Reker, G. T. (1987). Death attitudes across the life-span: The developmental and validation of the death attitude profile (DAP). *Omega*, **18**, 165-177.
- Gilbert, K. R. (2002). Taking a narrative approach to grief research: finding meaning in stories. *Death Studies*, **26**(3), 223-239.
- 橋本篤孝・中村公美・柳井美香・横内敏郎・鶴田千尋. (1993). 「死」に対する態度は加齢とともにどうか変わっていくか. *老年精神医学雑誌*, **4**(1), 51-58.
- 堀 薫夫. (1996a). 大学生と高齢者の老いと死への意識の構造の比較. *大阪教育大学紀要 第IV部門*, **44**(2), 185-197.
- 堀 薫夫. (1996b). 高齢者の死への意識と死への準備教育の可能性に関する調査研究. *日本社会教育学会紀要*, **32**, 86-94.
- 伊藤孝治・金崎悦子. (1992). 地域比較による老人の死生観の研究. *愛知県立看護短期大学雑誌*, **24**, 25-32.
- 伊藤孝治・松岡広子. (1993). 愛知県在住の老人と看護婦の死生観. *愛知県立看護短期大学雑誌*, **25**, 29-34.
- 伊藤孝治・永崎和美・一柳美稚子. (1991). 老人の死生観の傾向. *愛知県立看護短期大学雑誌*, **23**, 101-111.
- Kalish, R. A. & Kastambaum, R. (2001). Death. In G. Maddox (Ed. in chief), *The encyclopedia of aging: a comprehensive resource in gerontology and geriatrics 3rd edition* (pp. 269-71), New York: Springer Pub.
- 菅啓子・金崎悦子・武田正浩. (1991). 若者と老人の死生観の傾向について. *愛媛県立医療技術短期大学紀要*, **4**, 129-135.
- 金児暁嗣. (1995). 高齢者の宗教観と死生観: 宗教は死を和らげるのか. *平成5年度ジェロントロジー研究報告*, 51-64.
- 金児暁嗣. (1997). *日本人の宗教性: オカゲとタタリの社会心理学*. 東京: 新曜社.
- Kastenbaum, R. (2001). Thanatology. In G. Maddox (Ed. in chief), *The encyclopedia of aging: a comprehensive resource in gerontology and geriatrics 3rd edition* (pp. 1015-1017), New York: Springer Pub.
- Kastenbaum, R. (2004). *Death, Society, and Human Experience*. 5th Edition. Boston: Pearson A and B.
- Kastenbaum, R., & Costa, P. T. (1977). Psychological perspectives on death. *Annual Review of Psychology*, **28**, 22-249.
- 河合千恵子・中仲順子・中里克治. (1996). 老年期における死に対する態度. *老年社会科学*, **17**(2), 107-116.
- 川島大輔. (2004). 老年期の浄土真宗僧侶のライフストーリーにみる死の意味づけ. *京都大学大学院教育学研究科平成16年度修士論文 (未公開)*.
- Kenyon, G. M. (1999). Philosophical foundations of existential meaning In G. T. Reker, & K. Chamberlain

- (Eds.). *Exploring Existential Meaning* (pp.7-22). Thousand Oaks, London, New Delhi: Sage Publications, Inc
- 菊井和子・竹田恵子. (2000). 「死の受容」についての一考察：わが国における死の受容. *川崎医療福祉学会誌*, **10**(1), 63-70.
- 小池のぞみ・岩脇三良. (2001). 主観的幸福感と死に対する態度との関係：年齢要因を中心に. *昭和女子大学生生活心理研究所紀要*, **4**, 41-54.
- 黒田研二・青木信雄・井上学・久泉広子・山田尋志・秋山正子. (1994). 老人の死生観とその関連要因. *老年社会科学*, **15**(2), 166-174.
- Morgan, J. D. (1995). Living our dying and our grieving: Historical and cultural attitudes. In H. Wass & R. A. Neimeyer(Eds.). *Dying: Facing the facts*. 3rd Edition (pp 25-45). Philadelphia, RA: Tayler & Francis.
- Neimeyer, R. A. (1994). (Ed.). *Death anxiety handbook: Research, instrumentation, and application*, Washington, DC: Taylor & Francis.
- Neimeyer, R. A. (1997-98). Special article: Death anxiety research: The state of the art. *Omega*, **36**(2), 97-120.
- Neimeyer, R. A. (2001). Reauthoring life narratives: Grief therapy as meaning reconstruction. *Israel Journal of Psychiatry & Related Sciences*. **38**(3-4), 171-183.
- Neimeyer, R. A., & Fortner, B. V. (2001). Death anxiety in the elderly. In G. Maddox (Ed. in chief), *The encyclopedia of aging: a comprehensive resource in gerontology and geriatrics 3rd edition* (pp. 271-272), New York: Springer Pub.
- Neimeyer, R. A., Moser, R. P., & Wittkowski, J. (2003). Assessing attitudes toward dying and death: Psychometric considerations. *Omega*. **47**(1). 45-76.
- Neimeyer, R. A., & Van Brunt, D. (1995). Death anxiety. In H. Wass & R. A. Neimeyer(Eds.). *Dying: Facing the facts*. 3rd Edition. (pp 49-88). Philadelphia, RA: Tayler & Francis.
- 岡本裕子. (1990). 高齢者の死の受容と自我同一性に関する研究. *広島中央女子短期大学紀要*, **27**, 5-11.
- Owens, R. G., & Payne, S. (1999). Qualitative research in the field of death and dying. In M. Murray, & K. Chamberlain. (Eds.). *Qualitative Health Psychology: Theories and Methods* (pp.148-163). London, Thousand Oaks, New Delhi: Sage Publications, Inc.
- Polkinghorne, D. E. (1988). *Narrative Knowing and Human Sciences*. New York: State University of New York Press.
- Ranst, N. V., & Marcoen, A. (2000). Structural components of personal meaning in life and their relationship with death attitude and coping mechanisms in late adulthood. In G. T. Reker, & K. Chamberlain (Eds.). *Exploring Existential Meaning* (pp.59-74). Thousand Oaks, London, New Delhi: Sage Publications, Inc.
- Reker, G. T., & Chamberlain, K. (1999a). Introduction. In G. T. Reker, & K. Chamberlain (Eds.). *Exploring Existential Meaning* (pp.1-4). Thousand Oaks, London, New Delhi: Sage Publications, Inc.
- Reker, G. T., & Chamberlain, K. (1999b). Existential meaning: reflections and directions. In G. T. Reker, & K. Chamberlain (Eds.). *Exploring Existential Meaning* (pp.199-209). Thousand Oaks, London, New Delhi: Sage Publications, Inc.
- 杉山善朗・方波見康雄・中野修・阿部一男・竹川忠男・中村浩・佐藤豪. (1986). 高齢者の生き方の質 (quality of life)と「死生観」の関連性についての研究. *社会老年学*, **24**, 52-66.
- 辰巳有紀子. (2000). 日本の高齢者における死の不安と死生観. *聖心女子大学大学院論集*, **22**, 49-64.
- Templer, D. I. (1970). The construction and validation for a death anxiety scale. *Journal of General Psychology*, **82**, 165-177.
- Tomer, A. (1992). Death Anxiety in adult life: theoretical perspectives. *Death Studies*, **16**, 475-506.
- Tomer, A., Eliason, G. (2000a). Attitudes about life and death: toward a comprehensive model of death anxiety. In A. Tomer (Eds.), *Death attitudes and the older adult: Theories, concepts, and applications* (pp.3-22). New York: Brunner-Routledge.
- Tomer, A., Eliason, G. (2000b). Beliefs about self, life, and death: Testing aspects of a comprehensive model of death anxiety and death attitudes. In A. Tomer (Eds.), *Death attitudes and the older adult: Theories, concepts, and applications* (pp.137-153). New York: Brunner-Routledge.

- Tomer, A., Eliason, G., & Smith, J. (2000). The structure of the Revised Death Anxiety Scale in young and old adults. In A. Tomer (Eds.), *Death attitudes and the older adult: Theories, concepts, and applications* (pp.109-122). New York: Brunner-Routledge.
- Thorson, J. A., & Powell, F. C. (1990). Meaning of death and intrinsic religiosity. *Journal of Clinical Psychology*, 46(4), 379-91.
- Thorson, J. A., & Powell, F. C. (2000). Death anxiety in younger and older adults. In A. Tomer (Eds.), *Death attitudes and the older adult: Theories, concepts, and applications* (pp.123-136). New York: Brunner-Routledge.
- Viney, L. L. (1993). *Life stories: Personal construct therapy with the elderly*. West Sussex: John Wiley & Sons Ltd.
- Wong, P. T. P. (2000). Meaning of life and meaning of death in successful aging. In A. Tomer (Eds.), *Death attitudes and the older adult: Theories, concepts, and applications* (pp.23-35). New York: Brunner-Routledge.
- Wong, P. T. P., Reker, G. T., & Gesser, G. (1994). The Death Attitude Profile-Revised: multidimensional measure of attitude towards death. In R. A. Neimeyer(Ed.), *Death anxiety handbook: Research, instrumentation, and application* (pp.121-148). Washington, DC: Taylor & Francis.
- やまだようこ・河原紀子・藤野友紀・小原佳代・田垣正晋・藤田志穂・堀川学.(1999). 人は身近な「死者」から何を学ぶか: 阪神大震災における「友人の死の経験」の語りより. *教育方法の探究 京都大学大学院教育学研究科 教育方法学講座*, 2, 61-78.
- やまだようこ・田垣正晋・保坂裕子・近藤和美.(2000a). 阪神大震災における「友人の死の経験」の語りと語り直し. *教育方法の探究 京都大学大学院教育学研究科 教育方法学講座*, 3, 63-78.
- やまだようこ.(2000b). 人生を物語ることの意味: ライフストーリーの心理学. やまだようこ(編著). *人生を物語る: 生成のライフストーリー* (pp. 1-38). 京都: ミネルヴァ書房.

注

- 1 菊井・竹田(2000)は死に直面した個人自身の記述や評論家・専門職の見解を検討し、わが国における「死の受容」とは、人生の発達の最終段階における人間の成熟した肯定的で力強い生活行動をいい、達成感、満足感、幸福感を伴い、死に近く者と看取るものの協同作業で達成すると述べている。
- 2 死への態度の行動的構成要件には、遺書を書く、墓の手配をするなどの直接的に関係する行動の他に、墓参りや先祖の供養、葬式や法事への参加などが考えられる。
- 3 伊藤・永崎・一柳(1991)は、「死生観」を生と死の捉え方であり、より良く生きること、より良く死を迎えることに関しての個人レベルでの取り組みの規範や価値体系である定義している。
- 4 各尺度についての詳細はNeimeyer(1994)やNeimeyer(1997-98)に、欧米での死の意味づけに関する全般的な研究の動向についてはNeimeyer, Moser & Wittkowski(2003), Neimeyer, Wittkowski & Moser(2004), Neimeyer & Van Brunt(1995)に、特に高齢者に関する知見についてはFortner & Neimeyer(1999), Fortner, Neimeyer, & Rybarczyk(2000)に詳しい。
- 5 但し因子分析の結果は文化的な差異を示し、Gesserら(1987)の結果と若干異なる部分もあるとしている。
- 6 死の意味づけに影響するその他の人口統計学的要因として、まず「学歴」は積極的受容と回避的受容に寄与する、すなわち学歴の低いものほど死後の人生への期待が大きいということが報告されている(河合・他, 1996)。次に「経済状態」について死の恐怖と回避的受容との関連が報告されている(河合・他, 1996)。また杉山ら(1986)は生活費の依存型は自分の「死」についても他者依存的であり、反対に生活費自立型群は自分の「死」についても自律的で心理的距離をおいて眺めることができるようであったと報告している。さらに「居住形態」について欧米での施設入居者は自立して生活しているものと比較して非常に死の不安が高いとの報告(Fortner, et al, 2000; Neimeyer & Van Brunt, 1995)とは異なり、わが国では黒田ら(1994)が老人施設入所者と在宅老

人の死の意味づけを比較した結果、施設入居者に短命を期待するものが多かったとしながらも、死の不安や恐怖に関して差は見られず一様に低い値を示したと報告している。但しNeimeyer & Fortner (2001) が述べているように、居住形態は直接的に死の意味づけに寄与するというよりも貧しい健康状態や減退した人生への満足感、そして家族との関係性や経済状態を媒介して死の意味づけに影響するものであり、むしろこうした要因間の連関に着目することが必要であろう。その他、「民族性」については河合ら (1996) や金児 (1995) が日本人は諸外国と比較して死の怖れが顕著であると報告している。

- 7 身体的健康状態の他に、Fortnerら (2000) やNeimeyer & Fortner (2001) は、抑うつや心的外傷などの心理学的問題を高い死の不安の予測因子として挙げているものの、わが国では十分に注意が向けられていない。
- 8 その他の人格的要因として、まず「趣味」が有る場合、死との心理的距離が遠く、現実の生に肯定的であるが、趣味が無い場合には、死との心理的距離が近く、生に対しては悲観的、拒否的であり、死を情緒的に受け入れる傾向が強いと報告されている (杉山ら, 1986)。また「自我機能」については、積極的受容群は他群に比べて全般的に高い自我機能を備えている (岡本, 1990)。さらに「死の準備」は死の積極的受容と関連するとの報告がなされている (河合・他, 1996)。この他、「死の思索頻度」に関しては、堀 (1996a) が高齢者の実に81%が死を話題にしてきたことを呈示している一方で、老人が特に自分の死について他の年齢層より多く考える傾向があるとはいえないという報告 (伊藤・他, 1991) もあり簡単に結論付けることはできない。これは橋本ら (1993) の述べるように、受け入れてはいるもののあれこれ考えたくないという複雑な心境、敢えていえば死の不安の抑うつがあるためとも考えられる。
- 9 特に死の意味づけに影響するであろう、死への知覚された近接性や生活の質、主観的な時間の経過、そして老年期の発達課題の達成など高齢者特有の要因への注意深い洞察が必要である (Neimeyer & Fortner, 2001)。
- 10 質的研究は死の意味づけに関わる研究でも近年注目されてきており、この分野の著名な雑誌であるDeath Studiesの26巻3号には質的研究の特集が組まれていることからその関心の高さが伺える。
- 11 またNeimeyer & Van Brunt (1995: 52-57) は、絵画を用いて死の印象を探ろうとする投影法 (e.g. Feifel & Nagy, 1981) や言葉を読む際の態度を測定する実験を行う方法 (e.g. Alexander & Alderstein, 1958), Krieger, Epting & Hays (1979) によって開発されたThreat Index (TI) を用いた構造化インタビュー、20のオープンエンドな質問項目への自由回答を分析するRevised Twenty Statement Test (R-TST; Durlak, Horn, & Kass, 1990) を紹介しており、これらは死の意味づけの個性記述的側面を描写できることから今後さらに調査を行っていくだけの価値を有していると述べている。
- 12 前者に関しては例えばBlack&Rubinstein (1998-99) やGilbert (2002) などが挙げられ、後者にはCrosserly (2000) が挙げられる。またわが国においても、やまだ (1999, 2000a, 2000b) が友人やヒーローの死をどのように意味づけていくのかを個人の物語より迫った先駆的研究を行っている。

(博士後期課程1回生、教育方法学講座)

(受稿2004年9月9日、改稿2004年11月19日、受理2004年11月30日)

The meaning of death of the elderly : Perspectives and future approaches

KAWASHIMA Daisuke

The aim of this paper is to shed light on the meaning of death, especially of the elderly people in Japan. First of all, this paper provides some definitions of death-related concepts, i.e. death anxiety, fear of death, death acceptance, and especially the definition of death attitudes and the meaning of death will be discussed. Furthermore, the methodological issues on the meaning of death in the Western world will be treated. In addition, a review of the literature on the meaning of death will be provided. Moreover, studies on the meaning of death of the older populations in Japan will be described and the structure of the meaning of death proposed by the results obtained from statistical analysis will be provided. In this review, some of the demographic and personal factors that influence the personal constructs of the meaning of death are discussed. Finally, the problems of current research and future possible approaches will be proposed. In particular, the great potentialities of qualitative research that capture some of the complexities and fruitfulness of the human encounter with death are proposed in the final section.